

ハーマン・メルヴィルにおける色のイメージ

——「蒼白」について——

時 松 賢 二

「蒼白な」(pallid; pale)顔は血の気が失せて、生気がなく、病的である。蒼白のイメージは、処女作『タイピー』(1846)にはまるで見い出せない。『タイピー』はメルヴィルの南海の島での体験談であり、原始世界の健康的な生の歓喜に満ちあふれている。島のタイピー族の娘ファウエイは、主人公トム(=メルヴィル)の「特別なお気にいり」である。彼女の輝きに満ちた頬は、赤みを帯びているようにみえる。

Her complexion was a rich and mantling olive, and when watching the glow upon her cheeks I could almost swear that beneath the transparent medium there lurked the blushes of a faint vermilion.⁽¹⁾

メルヴィルの心をひくのは、文明に病んだ蒼白な表情ではなくて、タイピー部落をとりまく生き生きとした、色彩あざやかな自然をおもわせる色つやのよい顔、その赤らみのある頬なのである。

『レッドバーン』(1849)でもメルヴィルは、少年レッドバーンを通して赤らんだ頬へのあこがれを表明している。レッドバーンは家を出て、ニューヨークに行き、そこからある商船の船員となってイギリスに渡る。リバプールの町中をぶらついているときに、彼は馬車の御者とその従僕達の赤い頬を見て心が動かされる。

I was particularly struck with the red cheeks of these men : and the many evidences they furnished of their enjoying this life with a wonderful relish.⁽²⁾

またある日曜日には、レッドバーンはリバプールの郊外に田園風景を見に出かける。その夜、赤い頬を夢見ながら寝る。

My only resource was my bunk; in I turned, and, wearied with my long stroll, was soon fast asleep, dreaming of red cheeks and roses.⁽³⁾

彼の赤い頬への愛着は相当なものであることがわかる。

赤らんだ頬のことを、よくばら色の頬(rosy cheeks)などという。無垢と素朴、明るさと陽気、そしてとりわけ若さと健康の持ち主の『ビリー・パッド』(1924)の主人公ビリー・パッドの頬は、ばら色に輝いていないはずはない——“The bonfire in his heart made lu-

minous the rose-tan in his cheek.”⁽⁴⁾ ビリーのばら色に日焼けした頬は、何と健康的で人好きがすることだろう。

このように、メルヴィルは赤らんだ頬とそれが象徴している健康的な生、あるいは原始性というものに限りない愛情を注いでいるのである。しかしながら、何といってもメルヴィルの本領は蒼白さの描写にある。彼が真に力点を置いており、しかも彼をきわだって特徴づけているのは、彼の創造した蒼白な人物達である。たとえば、『ピエール』(1852) の場合を見てみよう。

田舎で暮らしていたころのピエールの顔は健康色に輝いていた。頑強な肉体を誇り、運動好きでもあった。何よりも旺盛な食欲(特に、朝食の)があった。メルヴィルはピエールのような健康人に限りなく心を寄せている。

…a thoroughly developed gentleman is always robust and healthy; and Robustness and Health are great trencher-men.⁽⁵⁾

ところが、ふとしたことでピエールは故郷の田舎を出て、都会で暮らさなくてはならないはめになる。汚ない都会の一室に閉じこもり、パンを得るために小説を書く。以前の食欲もはつらつさも失せる。一日中ほとんど何も食べないで、精神的にも物質的にも悲慘の極地の中で、売れない小説を書き続けるのである。

当然のことながら、ピエールの頬は田舎で生活していたころの健康的な輝きが失せ、蒼白になる。

Like a flower he feels the change; his bloom is gone from his cheek; his cheek is wilted and pale.⁽⁶⁾

作者メルヴィルがわれわれに伝えたいのは、この蒼白になっているピエールの方である。

今までにあげた作品からの引用文ですでに明らかになっていることかもしれないが、顔(特に、頬)の赤らみとか蒼白に関するメルヴィルの言葉の使用法は、象徴主義的であり、独特に心理的なものである。たとえば、諷刺小説『詐欺師』(1857) 中のばら色のイメージを見ると、

As by subtle saturations of its mellowing essence the tobacco had ripened the bowl, so it looked as if something similar of the interior spirit came rosy out on the cheek. But rosy pipe-bowl, or rosy countenance, all was lost on that unrosy man, the bachelor……⁽⁷⁾

独身男のことを“unrosy”だと形容しているが、これなどは特にメルヴィル独自の用法であろう。“unrosy”という言葉によって、単に顔にばら色を失なっているという意味だけを表わしているのではない。心理的な意味が付与されているのである。小説では独身男は人間不信の人間嫌いであり、狡猾で、疑い深く、詭弁に毒された人間として性格づけられている。こういった性格は、心理的な意味でのばら色の無さである。“unrosy”はメルヴィルが独身

男の性格に付与した心象である。今述べたようなメルヴィルの言葉の使い方に注意しつつ、蒼白さについて考えてみよう。

短篇「バートルビー」(1856)は秀れた象徴主義的作品だとされている。主人公のバートルビーはある法律事務所に書記として雇われるが、ある時期を境にして一切の仕事を拒否する。ただ、じっと窓の外の壁を見つめるだけである。食事もなく取ろうとしない。こんな彼に人のいい雇い主の弁護士は、警察に訴えることもできないで困りはてるが、思案の末、事務所を別のところに移すことによって解決をはかる。バートルビーはもとの事務所から依然として動こうとしなかったが、その事務所の所有者の訴えで刑務所に送られる。そこでも食事をすることも拒み、まわりの壁に向かって立ち続け、数日後死ぬ。壁のそばに居座り続け、短い受け答えの言葉以外は沈黙を保ち、出生も不明で、知り合いもなく、食事も仕事も拒否し、あげくのはてには衰弱死するのである。

こんなバートルビーに対して、語り手の弁護士はある種の蒼白さを感じないわけにはいかない。

...though so thin and pale, he never complained of ill health. And more than all, I remembered a certain unconscious air of pallid—how shall I call it?—of pallid haughtiness, say, or rather an austere reserve about him....⁽⁸⁾

この中の「蒼白なごう慢さ」(“pallid haughtiness”)は、バートルビーの生きざまを象徴し、ひいては作品全体の意味をも暗示しているのではないだろうか。

バートルビーの蒼白な表情は、まわりの人々の色つやがよく、晴れやかに輝いている顔と著しい対照をなす。人々の光彩のある顔は、世界が幸福に満ちていると思わせる。それに対し、バートルビーの色彩の失せた、蒼白な顔は「悲惨」(“misery”)の存在を連想させる。

I remembered the bright silks and sparkling faces I had seen that day, in gala trim, swan-like sailing down the Mississippi of Broadway; and I contrasted them with the pallid copyist [Bartleby], and thought to myself, Ah, happiness courts the light, so we deem the world is gay; but misery hides aloof, so we deem that misery there is none.⁽⁹⁾

バートルビーの蒼白は、悲惨さを表わしていると言っていい。彼は悲惨に押しつぶされそうになりつつも、それに屈しないで、受動的ながらも抵抗を貫くだけの「ごう慢さ」を持っている。

前に述べたように、ピエールもある時期から悲惨な状況に追いこまれ、蒼白になる。書く作品は世間から無視され、拒絶される。それでも彼は片意地なまでに真実を求めて創作を続ける。バートルビーが「ごう慢さ」を持ち合わせたとすれば、ピエールには誇り高さがある⁽¹⁰⁾。節操を保つための、人間としての誇りがあればこそ、ピエールは悲惨を歓喜に、それも神の光に輝いている歓喜に変えることができるのである。

With the soul of an Atheist, he wrote down the godliest things; with the feeling

of misery and death in him, he created forms of gladness and life. (11)

ピエールの書く作品の主人公はヴィヴィアという名前である。ピエールは真実を求めて、蒼白になっているヴィヴィアに目を見開いてもらいたいのである。

“Cast thy eye in there on Vivia; he, who in the pursuit of the highest health of virtue and truth, shows but a pallid cheek!...”(12)

ヴィヴィア(=ピエール)の蒼白な頬は、「美德と真実の最高度の健康」を求める頬であり、単なる弱々しい、よこしまな頬ではない。

蒼白な人物の代表は『白鯨』(1851)の主人公のエイハブ船長である。『白鯨』の28章には、語り手のインシュメールが初めてエイハブを見たときの模様が描かれている。インシュメールによると、エイハブは非常に肉体的に頑強に見え、顔は黄褐色に焼けている(“tawny scorched face”)。つまり、彼の頬は実際には蒼白ではない。

それにもかかわらずエイハブを蒼白な人物として数えるのは理由がある。「日没」と名づけられている短章は、全てエイハブの独白で占められている。彼の独白は次のように始まる——“I LEAVE a white and turbid wake; pale waters, paler cheeks, where'er I sail.”(13) エイハブが航海するのは「蒼白な海」である。彼の航海の軌道は「より蒼白な頬」である。彼は蒼白な頬にあくことなき執着を示しているのである。

『白鯨』はエイハブが鯨を追跡する物語である。追跡の軌道そのものが蒼白であることは非常に興味深い。物語の主題が蒼白さにあるということを示唆しているからだ。

『白鯨』の最も有名な章である「鯨の白さ」では、メルヴィルはきらびやかな、色あざやかな世界は虚偽であり、上辺だけのものであると述べている。メルヴィルが「鯨の白さ」の章の中で追求している「白さ」は、われわれがここで扱っている蒼白さと同一性があるのではないだろうか。「鯨の白さ」の一番最後の部分は意味深長である。

And of all these things the Albino whale was the symbol. Wonder ye then at the fiery hunt?(14)

エイハブは、なぜあのように偏執的に鯨を追うのだろうか。それは鯨が白いからだ。「白子」(“Albino”)のような蒼白な色をしているからである。

エイハブは白鯨の追跡のために、あまりにも苦悶の灼熱地獄に身を焦がすので夜、時々夢遊病者になる。眠っているうちに、たまらずベッドから起き、無意識的に歩き出すのである。これはエイハブの肉体が歩いているという感じではない。空白な精神のかたまりみたいなものが、たまりきれず歩き出しているという感じである。

Therefore, the tormented spirit that glared out of bodily eyes, when what seemed Ahab rushed from his room, was for the time but a vacated thing, a formless somnambulistic being, a ray of living light, to be sure, but without an object to color, and therefore a blankness in itself. (15)

苦悶のほとぼしりが無意識の底まで浸透し、空白でしかも非常な生命力を感じさせる存在となって歩き出すのである。このエイハブの色づけようもなく、空白に苦悶する精神は、まさに蒼白そのものである。

このような精神状態を、メルヴィルは創作時に経験していたように思われる。ピエールが創作しているときの顔は蒼白である。バートルビーが筆写しているときもそうだ——“But he wrote on silently, palely, mechanically.”⁽¹⁶⁾ また、『マーディ』(1849)の主人公のタジが書いているときも頬が蒼白になる——“My cheek blanches white while I write; I start at the scratch of my pen……”⁽¹⁷⁾ (“white”は蒼白であることを指すか、もしくはその強調形であろう。)これらの、メルヴィルの作品の登場人物が書いているときの蒼白さは、メルヴィル自身が創作しているときの蒼白さを反映していることは明らかである。

バートルビー、ピエール、エイハブはメルヴィルが特別な共感を持って創りあげた悲劇的英雄であり、彼等の特徴は蒼白に執着して譲らないことにある。メルヴィルの短篇に「乙女達のタルタロス」(1855)というのがある。これは製紙工場で機械の奴隷となって働く女工達の悲惨さを扱ったものであり、蒼白のイメージが頻出する。この作品の終りの方でメルヴィルは女工達の蒼白な表情からキリストの苦悶の顔を連想している⁽¹⁸⁾。バートルビー、ピエール、エイハブ、ひいてはメルヴィルの蒼白さもまた、(十字架の)キリストの悲惨と苦悶を象徴的に表わしているのではないだろうか。

注

- (1) Herman Melville, *Typee* (Russell & Russell, Inc., 1963), p. 114.
- (2) Herman Melville, *Redburn* (Penguin Books, 1977), p. 276.
- (3) *Ibid.*, p. 293.
- (4) Herman Melville, *Billy Budd, Sailor and Other Stories* (Penguin Books, 1972), p. 355.
- (5) Herman Melville, *Pierre* (Hendricks House, Inc., 1962), p. 18.
- (6) *Ibid.*, p. 318.
- (7) Herman Melville, *The Confidence-Man* (A Norton Critical Edition, 1971), p. 114.
- (8) Herman Melville, “Bartleby” *The Piazza Tales* (Russell & Russell, Inc., 1963), p. 41.
- (9) *Ibid.*, p. 40.
- (10) See Herman Melville, *Pierre, op. cit.*, p. 306.
- (11) *Ibid.*, p. 398.
- (12) *Ibid.*, p. 356.
- (13) Herman Melville, *Moby-Dick* (Houghton Mifflin Company, 1956), p. 142.
- (14) *Ibid.*, p. 163.
- (15) *Ibid.*, p. 168.
- (16) Herman Melville, “Bartleby” *The Piazza Tales, op. cit.*, p. 28.
- (17) Herman Melville, *Mardi* (College & University Press Services, Inc., 1973), p. 308.
- (18) See Herman Melville, “The Tartarus of Maids” *Great Short Works of Herman Melville* (Haper & Row, 1969), p. 221.

Summary

Color Images in Herman Melville: A Note on "Pallidness"

Kenji TOKIMATSU

Symbolism is the intrinsic mode of Melville's writings, and various attempts on the part of critics have therefore been made to explore the nature of Melville's symbolism. This article dealing with color images in Melville's works is intended to be a contribution to the study of his symbolism.

My consideration with respect to the color images is confined to the color of the face, especially the cheek, of the characters Melville portrays in his works. After a brief consideration of the "rosy" cheeks which are symbolic of health and some other primitive qualities, I consider the "pallid" cheeks, wherein Melville seems to feel something grand, tragic, and heroic. Pallidness as a color in some of Melville's works is a symbol and is associated with the miserable and tormented face of Christ.